

行政視察報告書

令和4年8月10日

鹿沼市議会

「自由民主党・希望・公明党」会派合同

1. 行政視察日程について
期 間・・・令和4年7月25日（月）～27日（水）

2. 訪問都市と調査事項について
 - (1) 北海道旭川市 7月25日（月）午後2時00分～午後3時30分
「観光施策について」
 - ① 大雪カムイミンタラのDMO登録の経緯について
 - ② ICTパーク開設の経緯、施設が目指す目的、役割について

 - (2) 北海道富良野市 7月26日（火）午前10時30分～午前12時00分
「一般廃棄物のごみ資源化、紙おむつ固形燃料化事業について」
 - ① 導入経緯について
 - ② 事業の概要について
 - ③ 導入までの課題、現状の課題について
 - ④ 今後の展望について

3. 参加者 自由民主党会派 津久井健吉・増淵靖弘・宇賀神 敏
希望会派 鈴木 毅・橋本 修・佐藤 誠
公明党会派 鈴木敏雄・梶原 隆



7月26日 富良野市議場

4. 調査報告

(1) 北海道旭川市

・北海道旭川市の概要について

旭川市は、北海道のほぼ中央に位置し、石狩川と多くの支流が合流する肥沃な盆地。医療福祉・教育・文化施設、公的機関など都市機能が充実する中心都市である。年間の寒暖差、昼夜の寒暖差がとても大きく、四季が明瞭で冷涼な気候であり、地震など自然災害が少ない。

また、航空路線の充実により、国内外から年間500万人を超える観光客が訪れ、旭山動物園は日本最北かつ全国有数の動物園になっている。

旭川にゆかりのある文学者や芸術家も多く、市内各所に野外彫刻作品が置かれているほか、旭川家具をはじめとした木工業が盛んである。

札幌市に次ぐ北海道第2の人口規模だったが、2010年代に入ってから人口減少が加速化している。

① 大雪カムイミンタラのDMO登録の経緯について

DMO化の導入経緯として、旭川市と近隣町としては、

- ・人口減少
- ・観光の裾野の広さ
- ・観光の個人化・嗜好の細分化
- ・圏域内の多種多様な魅力
- ・官民連携の必要性
- ・観光地経営の主体

の6つ要因がありました。

旭川市と近隣町も人口減少の課題があり人口減少に歯止めをかけ、地方創生の施策として「観光」は、産業として様々な分野に関わり裾野が広い。また、観光のスタイルも旅行会社が用意したパッケージ商品から、ICTを活用し行先や宿泊先などを自分で決める個人旅行者が増加している。その中、旭川市と近隣町には、まだまだ魅力的な観光スポットが眠っており、官民が連携することでこうした地域の魅力に磨きをかけ、効果的な発信や、滞在時間の長期化など稼ぐ力を高めて行くことが求められている。

そういった状況では従来の観光振興体制では不十分で、データに基づくマーケティングと検証、自治体の枠を超えた連携、地域内経済循環の創出などに積極的に取り組んでいく必要があり、こうした時代の要請に応えるため、

新たな観光地経営の主体として、1市7町での「観光地域づくり法人(DMO)」導入を目指すこととなった。

また、当初はDMOの前に観光圏認定を目指していたが、国の方針がDMO推進となり、補助金などの支援が受けやすくなるなどメリットが大きいことから、DMO設立となった。

導入経緯として、

H28.11に登録申請を観光庁に提出

- ・ 圏域の関係者との協議
- ・ 基本戦略の策定
- ・ 基幹事業の決定と財源、人員の見通し確保

H29.10に法人登記

H29.11に日本版DMO登録

とDMO登録まで1年がかりとなっているが、主には圏域の関係者との協議に時間がかかった。

導入までの課題として、

- ・ 各自治体との合意形成
- ・ 自主財源の確保
- ・ 関係組織との役割分担

が挙げられた。新たな組織化に伴い、各自治体には負担金の拠出を求めることもあり慎重な態度になった自治体もあった。

また、新型コロナの影響もあり、観光業も大きな打撃を受け、自主財源の確保に苦慮している。

そして、新たな観光の組織を設立したことにより、これまでの観光組織との役割を分担することが難しいという点が課題として挙げられた。

その他、「DMOの基本戦略」「DMO県内の各コンテンツ」「基本戦略に基づく取組」について説明を受けた。こちらの内容については、地域の特色に応じたコンセプトだったり商品開発や体制づくりの話でしたが、共通して重要なことは、観光資源の調査、観光客のニーズの把握、そこから1年を通じて観光誘致などを行い、いつ来ても何度でも楽しめる地域を実現することでした。

② ICT パーク開設の経緯、施設が目指す目的、役割について

2021年2月、歴史ある旭川国民劇場をベースに新たなeスポーツ施設「ICTパーク」を開設した。

eスポーツイベントだけでなくプログラミング教室やVR映像体験などの複合的な目的に対応したICT施設となっており、最新の通信技術「ローカル5G」を利用した高速通信の活用・実証の拠点にもなっている。

大きな背景としては「ICT人材や事業の育成・誘致」という行政課題の解決が目標になっている。また、「まちなかの賑わいの創出」といった観点から、新たに若者の目的地や観光スポットとして、eスポーツやプログラミングを切り口とした施設が検討された。

人材育成がひとつ大きな目的で、ICT企業を誘致するにも人材の不足が障害になったり、逆に能力のある人材を輩出しても活躍の場が無いので都市部へ出て行ってしまったりとジレンマがある。

そこで注目されたのがeスポーツで、eスポーツ施設を作るなら中心部がいいと、以前は映画館として親しまれていた「コクゲキ（国民劇場）」を、オーナーさんのご協力のもと使わせて頂けることになった。

ICTパークは、1階が「トレーニングジム」「eコミュニケーションスペース」となっており、ゲーミングPCやフリーWiFiを備えており、3階は180名が収容可能な劇場型イベントホールとなっている。

その他には、NTT東日本が運営する「スマートイノベーションラボ北海道」や、月額契約で使用できるコワーキングスペースなどが運営されている。

【所感】

鹿沼市の令和2年度の観光客入込客数は、約190万人と決して少なくはない。地方創生の一環として、産業の裾野が広い観光施策を推進することは重要で、観光スポットの掘起こし、官民が連携することでこうした地域の魅力に磨きをかけ、効果的な発信や、滞在時間の長期化など稼ぐ力を高めていくため、「鹿沼市観光協会」をDMO化する必要があると思います。

また、鹿沼市のDX（デジタルトランスフォーメーション）を推進していく上で、ICT人材の輩出を目的とした、ICTの拠点となる施設の開設が必要です。廃校など休眠施設の利活用も併せて考えてほしいと思いました。その中で、年齢や身体的に不自由な人も関係なく多様な人々が参加できる「eスポーツ」を取り入れることで、新たな賑わいが生まれることが期待できます。

【視察の様子】

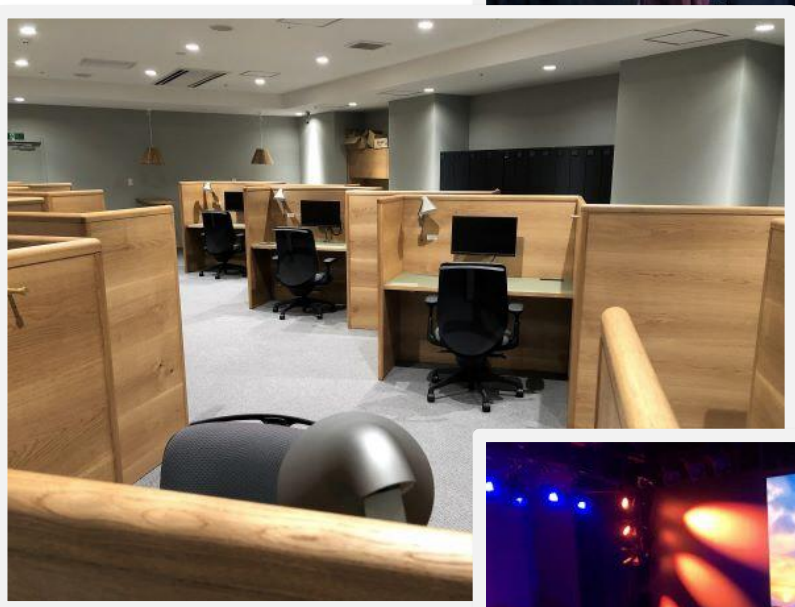


トレーニングジム

e コミュニケーションスペース



コワーキングスペース



イベントホール



(2) 北海道富良野市

・北海道富良野市の概要について

富良野市は、北海道のほぼ中心にあり、富良野盆地の中心都市であり、市内の約7割を山林が占める。

「へそとスキーとワインのまち」を標榜したまちづくりは、へそ祭り、良質な雪質のスキー場、ラベンダーに代表される花観光、ワイン・チーズなどの特産品や体験観光の充実により、日本を代表する観光地づくりを推進している。

人や環境にやさしいごみのリサイクル・再資源化の取り組みは、市民の協力があって実現できた公民協働の先進的な取り組みである。

まちの顔となる中心市街地は「フラノ・マルシェ」そして「マルシェ2」が、多くの交流人口をまちなかへと誘導し、賑わいとコミュニケーションを存続させるエリアとして高い評価を受けている。

① 導入経緯について

ゴミ処理の沿革としては、

昭和57年 全量埋立

昭和58年 生ごみ、乾電池、その他の3種分別を試行

昭和60年 3種分別本格稼働

昭和63年 6種分別本格稼働(生ごみ、固形燃料ごみ、空き缶、あきびん、乾電池、一般ごみ)

固形燃料工場完成、製造開始

資源化率 48.3%

平成5年 7種分別、粗大ごみの有料化

資源化率 56%

平成12年 10種分別、ペットボトル分別

平成13年 「燃やさない・埋めない」を基本理念とした14種分別を開始
資源化率 62.1%

平成15年 資源化率 90.3%

平成26年 衛生用品の固形燃料化実証実験を同年実施

平成27年 ごみステーションを「資源回収ステーション」に名称変更

平成28年 病院から排出される非感染性使用済み紙おむつ受入開始

平成30年 衛生用品資源化処理事業開始

となっており、昭和63年からごみ資源化として固形燃料(RDF)の製造を

開始した。

平成15年には資源化率が90%を超え、令和3年では、89%と高い資源化率を維持している。

今後社会的な課題となる紙おむつについての固形燃料化は、平成30年から本格的な事業を開始した。

② 事業の概要について

処理区域の世帯・人口は、10,441世帯で20,293人となっており、ごみは14種分別とし、指定ごみ排出袋は6種となっている。

資源化率は、令和3年度は89%となっており、その内訳は、

・たい肥化	28%
・固形燃料製造	35%
・容器包装・有価物	24%
・焼却	8%
・埋立	3%

となっている。

分別の啓もうとしては、各地域で分別不適ごみを題材に、ごみ分別研修会・出前講座を開催している。

資源回収ステーションは、地域で当番制、または管理担当者を決めて維持管理を行っている。

主な施設として、固形燃料ごみの燃料化は、「富良野市リサイクルセンター」が昭和63年から総事業費298,850千円で開設した。処理コストは、4万円/トンで、製造された固形燃料(RDF)は、製紙会社に4,000円/トンで販売している。また、生ごみたい肥化は、「富良野広域連合環境衛生センター」が平成15年に総事業費3,299,230千円で供用開始した。製品化したたい肥は、JAには1,100円/m³、個人には100円/10ℓ・袋で販売している。

③ 導入までの課題、現状の課題について

当初からの課題としては、きちんと分別されていないごみが混ざってしまうことで、破碎機が壊れてしまうことがあった。分別ができていないごみ袋に赤いシールを貼って排出ルール of 徹底を図っている。

分別の継続的なモチベーションを保つため、リサイクルの「見える化」を実践している。生ごみのたい肥化事業については、生ごみたい肥をJAや個人に販売し、家庭菜園やガーデニングに利用されている。

固形燃料の販売先からの要請で、固形燃料ごみの塩分ダイエット化に取り組んでいる。

生ごみ排出袋は、以前はポリエチレン製だったため、たい肥の残渣として残ってしまっていた。現在はより安全なたい肥となるよう生分解性バイオマプラスチック（ポリ乳酸）を使用している。

④ 今後の展望について

- ・ 固形燃料（RDF）利活用推進
- ・ 使用済み紙おむつのリサイクルシステムの効率化

【所感】

鹿沼市の分別と大きく異なるところは、「燃やすごみ」の中から「生ごみ」を分別している点です。

鹿沼市の令和2年度のリサイクル率は12.9%で、今後リサイクル率を高めるためには、「生ごみ」と「生ごみ以外の燃やすごみ」の分別が課題になると思います。

その課題解決ためには、生ごみからたい肥化する仕組み、燃やすごみから固形燃料を作る仕組みを構築し、市民がしっかりと分別できるよう、啓もうと指導が必要となります。

早い段階で、構想をインフォメーションし、市民の皆さまの意識改革のため、ゴミステーションの名称を「資源回収ステーション」に改め、「生ごみ」の分別からたい肥化までを第1目標として取り組みを開始すべきと感じました。

紙おむつの固形燃料化については、導入する「紙おむつ燃料化装置」の性能によるところが大きい印象。富良野市では、600kg/日が処理可能な装置を使用しており、処理中にアンモニア臭が発生するため、処理量に注意をしていると説明を受けました。

鹿沼市においても「紙おむつ燃料化装置」の導入を考える必要があり、設置する場所と併せて検討をしていくべきです。また、紙おむつを効率的に回収するためには、保育園、老人施設、病院などから事業系ごみとは別に回収する仕組みも必要だと感じました。

【視察の様子】



製品一時貯留庫

(3) その他の視察について

① 道の駅

・「三笠」

道の駅として北海道で1番目に登録されました。国道12号線に接しており、直径10mの大型水車が目印で、温泉施設やパークゴルフ場も併設されています。キャンピングカーでの車中泊が可能。

・「石狩 あいろーど厚田」

北石狩エリアの観光拠点。1階は石狩の地場産品が揃うショップと、飲食テナントが営業しています。2階は歴史と食のフロア。まちの文学・芸術、自然・歴史にふれられる展示など、石狩・厚田の魅力を体感できます。最上階の展望フロアは、日本海を一望する石狩屈指の絶景スポット。夕暮れ時には、夕日が日本海を染めながら水平線に向かって沈んでいく、感動が体験できます。

・「千歳 サーモンパーク千歳」

千歳市と小樽市を結ぶ国道337号沿いに位置しています。周辺を流れる清流千歳川には毎年サケが遡上し、インディアン水車と呼ばれる水車によるサケの捕獲風景は千歳の秋の風物詩となっています。また、新千歳空港や道央自動車道千歳ICから車で約10分程度と交通アクセスにも恵まれている。

② ボールパーク

・「エスコンフィールド HOKKAIDO」

北広島市で建設中のエスコンフィールド HOKKAIDO の工事現場を見学。2023年春に完成予定で、日本ハムファイターズのホームグラウンドとなります。細部にまでこだわった新球場は、日本初の開閉式屋根付き天然芝球場。五感で心地よさを感じることができる、プレイヤーファーストとファンファーストの両立を目指す球場として期待されています。

③ スケートボードパーク

・「メムシ公園スケートパーク」

千歳市では数少ない貴重な公共スケートパーク。セクションも全体的に大きくオーソドックなものは揃っており、フラット部分も広く初心者には滑りやすいパークです。

5. おわりに

全国的に、人口減少といった地方創生の問題や、環境問題への対策を実施している中、今回の視察では、観光施策の中の新たな DMO や ICT の取り組み及び、環境問題に対するごみの資源化について先進的な施策を感じとることができ、大変参考になりました。今後、鹿沼市への政策提言に繋げて参りたいと思います。

また、視察に際してコロナ禍ではありましたが、我々を快く迎えていただきました旭川市の職員や DMO スタッフ、富良野市の職員や議長といった方々には、大変にお世話になりました。

いずれの視察地においても活発な質疑応答があり、また、e スポーツ体験やリサイクルセンター見学もさせていただき、大変有意義な視察であったことを申し添えて報告いたします。

6. 視察都市の対応者について

(1) 北海道旭川市

議会事務局 議会総務課 書記 今 勇人 様

(2) 北海道富良野市

議 長 黒岩岳雄 様

市民生活部 環境課 課 長 高橋秀文 様

議会事務局 事務局長 井口 聡 様



7月25日 旭川市 ICT パーク

以上